



倉本聰コレクション10

文五捕物絵図

*** (2)

scénario
1967

倉本聰



文五種物絵圖

… (2)

キヤスト	滝川竜太(バク)	石原裕次郎	九条浩次
黒岩頼介(クロ)	渡哲也	松川大久保	神田正輝
黒岩恵子	仁科明子	南	穴戸錠
三浦直子	篠ヒロコ	木内	平泉征
深町行男	佐藤慶	吉野	武藤章生
一色光彦	玉川伊佐男	新井	柳生博
加賀見乙吉	中条静夫		浜田晃
丸山米三(マル)	高品格		山根久幸
高木吾一	草薙幸二郎	スタッフ	
大内正	小野武彦	制作	石野憲助
平原春夫	栗津號		森川一雄
清水英子	新井春美		山口剛
日高明	寺尾聰	演出	村川透
由比	北浦昭義		他

編集

小宮山量平
後藤洋一

KURAMOTO SOH COLLECTION 19

大都会

1984年6月 第1刷

著者／倉本聰^{くらもとそう}◎

発行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町15-6

電話 (03)203-5791

振替 東京9-95736

1984 Printed in Japan／0393-91619-8924

加藤文明社印刷／島田製本

倉本聰作品

文五捕物絵図
(2)

NHK制作
昭和42年12月29日
～昭和43年8月23日放送

文五捕物絵図(2) もくじ

天保十七歳 7

越前子守唄考 46

男坂界限 89

天保十一年初夏

131

機の音

171

文五の恋

213

下総かくれ里

251

装画・題字

装幀

小野州一
杉浦範茂

天保十七歳はいていしちせん

「樽屋」

一人酒を飲む文五郎。

語「青春とはいったいどんなものだ？」

——それは、一度だけ燃え上がる季節。狂喜し、笑い、
つまずき、絶望し、心の底まで傷つく季節」

店内にいっぱい客の間を、忙しく動きまわるお京の
アップ。

語「お京。十六歳。初恋の相手三次の死が、彼女の心に傷
痕を残した。あれ以来、文さんたちも樽屋から、足を
遠のけ近づこうとしない」

画面に文字が——「大晦日 七ツ（午後四時）」

青木屋の若衆、威勢よくかけ込む。

若衆「へいこんにちは！ 青木屋からかけ取りにまいりや

したが！」

矢七「（奥から）与之さんなら番屋だぜ！」

若衆「へいッ、どうも——おや、こりゃ親分」

文五郎「景気はどうだえ」

若衆「どうもこうも大晦日ってなるとみんなどっかに消え

ちまいやがる」

文五郎「ははは」

若衆「ごめんなすって」

おしの「（中から）お京ちゃんお銚子あがってますよッ」

お京、徳利を文五郎の所へ運ぶ。

文五郎「お京ちゃん」

お京（つく）

文五郎「いけねえよ若えもんが、いつまでしょんぼり沈ん
でいちゃあ」

おしの「（裏で、矢七に）板わさ二丁！」

矢七「へい板わさ！」

文五郎「（お京に）明日は正月だ、陽気になりねえな」

おしの「（奥から）お京ちゃん、お刺身あがり！」

お京、奥へ。

入れちがいにかけ込むおけい。

おけい「お父っつあん!!」

文五郎「でけえ声だねえ」

おけい「王子稲荷に行ってきたいい!!」

文五郎「王子?」

おけい「だって関東じゅうの稲荷狐が年越しにあそこに集まるって」

文五郎「それよりここを手伝っていったらどうだえ。見ねえな三人で目が廻りそうだ」

男「(とび込んで) 神原で!! 鏡餅を持って参じました!!」

おしの「おそいねえ! 奥へ!!」

男「へいッ」

魚吉「(とび込む) ちわッ、魚吉ですがかけ取りを一つ」

おしの「お京ちゃん!」

お京「(魚吉に) 奥へ来て!」

客「(とび込んで) ウウ寒いウウ寒い!

おうッ、熱いとこ二本だ!」

お京「お銚子二本!」

おしの「矢七つつあん、かまの火が強すぎるよッ」

焚火(番屋前)

燃える。

すつとんでくる青木屋の若衆。

番屋へとび込む。

番屋

大掃除の文五たち。

若衆「ちわッ、与之さんは」

文五「奥だわ」

丑吉「かけ取りかい?」

若衆「へいッ、毎度!!」

丑吉「(奥へ) 与之さん、青木屋さんがかけ取りだと」

幸吉「(奥から出て) 与之さんなら逃げたぜ、あんたの声

がしたと同時に」

若衆「あッ、畜生ッ、与之さん待てッ」

表へとび出して追う。

丑吉「岡ッ引が追われてりゃ世話ねえ」

どっと笑う三人。

辻

門松の間を走ってくる青木屋の若衆。

若衆「与之さん! 与之さん!! 畜生ッ。待ちやがれッ!!」

若衆が消えると、門松の後ろから与之助そつと姿を現

す。

与之助「フー危ねえ!! 行こうって、おいらもかけ取り
(通い帳をめくって)。上州屋のおみえ!!」

上州屋米店(仲買店)

与之助とび込む。

与之助「へいッ、ごめんなすって!! かけ取りで」

番頭の与平が、

与平「おみえなら裏だよッ」

与之助「毎度ッ」

横手ののれんを奥へ向う。

勝手場

与之助とび込み、

与之助「ちわ!!」

掃除していた三人の女中(千代、奈々、まき)パツと

顔を輝かし与之助に突進。

与之助「な、なに——(思わず逃げ腰)」

奈々「頼みがあるのよ!」

与之助「あつしに!!」

奈々「うん」

与之助「——ダ、ダメだダメだッ。勘定を待てたってそ

りや無理」

まき「何いってんのよ!」

千代「私たちつけなンてありやしないじゃない」

まき「ねえ」

奈々「あのね、与之さん貸衣裳の手づるない?」

与之助「貸衣裳——そりやもうあつしの」

まき「よかった!」

千代「都合して!」

与之助「いいですとも! (帳面を出し、ふと不安になって)

あの、ちゃんとお金は——払っていただけで

千代「もちろんよ!」

奈々「ただし半値よ」

与之助「半——」

奈々「それと払いは来年廻し」

与之助「ラ——」

千代「私から私から! あのね(与之助に耳打ち)」

まき「ホラ、帳面に書く!!」

与之助(あわてて書く)

まき「あたしは(耳打ち)フフッ」

与之助(気おされて書く)

奈々「私のは(耳打ち)」

与之助「クスグツタイ！　クスグツタイ！！」

奈々「（たたいて）ダメねッ（耳打ち）」

与之助「へ、へい（書く）」

まき「あ、それからみえの（耳打ち）」

与之助（書く）

奈々「全部今日中に揃えてよ！」

与之助「エー。エエッ！！」

奈々「五ツまで」

与之助「そんな！！」

千代「やってヨォ」

与之助「へエエ——！！　いったい何がありますんで」

奈々「今夜宴会」

与之助「宴会！？　誰の！？」

まき「私たちのよッ」

千代「女中と丁稚だけでドンチャン騒ぎ」

与之助「ドンチャン」

まき「半年も前から計画してたんだもん」

千代「ねえッ」

まき「みんなでこっそりいろんな恰好して、驚かしっこし

ようって約束なんだもん」

千代「ねえッ」

与之助「ねえッ、はいけど、こりや大事だわ！　あ、み、

みえさんいませんか。みえさん、勘定が」

千代「裏よ！」

与之助「裏——どうも」

裏庭

丁稚の伊作、勇吉、巳之、泉吉、陽気にかけて声をかけながら米俵をリレー式に運んでいる。

一とオ、一とオ、二とオ、二とオ、三とオ、三とオ、

四とオ、四とオ。

与之助すつとんでくる。

与之助「チワッ。あの、みえさんは！」

井戸端で水くみしていたみえ、あわてて厠かわにかけこも

うとする。

与之助「あ！　み、みえさん！　勘定！！」

みえ、厠の中へすべりこむ。

与之助「みえさん！　かけ取り！　みえさん！　かけ取

り！」

泣きそうな顔でドンドン戸をたたく。

みえの声「入ってます」

与之助「みえさん！！　みえさん！！　殺生だ！！　みえさん！！

(ドンドンドンドン)

みえの声「はいってます!!」

米を運びつつ笑っている四人。

一とオ、一とオ、二とオ、二とオ、三とオ、三とオ、

四とオ、四とオ。

タイトル流れて。

番屋・表

画面に文字が——「七ツ半(午後五時)」

松飾りにいきなり中から男女のわめき声。

女の声「何するのさッ!!」

丑吉の声「よさねえかッ」

通りかかって立ち止まる文五郎。

番屋

女房の胸ぐらをつかんだ江戸前の亭主、文五ら必死に

二人を分ける。

文五「けんかあよしなよッ」

亭主「(酔っている)親分、おいらあね」

丑吉「わかったよ、しかし、いくら借金が返せねえからっ

て娘を売とばすは無茶じゃねえか」

亭主「あつしゃね親分、これでも江戸っ子だよ!! ええ、

神田生まれの神田育ち、暮れの大晦日に五両の金が返

せねえってのは、やぐじやねえか。エエ、だから、こ

の際男一疋、娘を吉原へ売っぱらってデスね」

女房「バカをいいよ!!」

亭主「すつこんでろおたふく!!」

女房「飲む金があつて何がすつこんでろだ!」

亭主「な、に、をオ!?」

文五「まあまあ」

女房「あの娘を売るくらいなら私を売とくれッ!!」

亭主「(吹き出す)プーッ」

女房「何さッ」

亭主「(ゲラゲラ笑つて)親分、きいた!? この面で私

を売とくれ、だつて、プーッ」

文五「まあまあ」

亭主「夜鷹になつたつて買手あつかねえや」

女房「いったね!!」

亭主「あ、痛え!! かじりやがった!! コラ!! コラ!!」

丑吉「よさねえか!!」

女房「キ——ッ!!」

亭主「イテテ、痛、痛、痛えッ!」

同・表

文五郎微笑、歩きかける、と、後から、

長谷「とっつあん」

文五郎「こりゃあ、旦那」

長谷「(中を指して)何事だえ？」

文五郎「なあに、大も喰わねえ何とやらだ」

長谷「フッフ——まずは静かな年の暮れか」

文五郎「あんまり静かでもねえですがね」

中でドタバタ音がつついてる。

長谷「ハッハッハッ、父つつあん身一つもてあましてい

な」

文五郎「まあね」

長谷「隠居して初めての大晦日ともなりやあなあ——どう

だ、そこらで一杯軽く」

文五郎「いいんですかい？」

長谷「若え者が廻ってらあ、お互い年寄りの出る幕じゃね

えようだ」

文五郎「フッフッフッフ」

そば屋

忙しさ。

客「おッ」

客2「何だえ？」

客1「しッ」

どこかで半鐘が鳴っている。

客2「火事か」

半鐘が近くでも鳴りだす。

客2「近えじゃねえか！」

客1「(パツと立ちあがる)おしのちゃん！勘定はここ

へ置くぜ!!」

客2「お、おいらも行くッ!!」

女中「毎度ありがとうございます！」

客「いいお年をッ」

女中「いいお年をッ」

つられてとび出す二、三の客。

与之助「(とび込む)寒い寒い！」

女中「火事はどこだえ？」

与之助「知るもんか！こちとらそれどころか、さっぱり

かけ取りが進まねえのに、五ツ刻^{どき}までに大量の貸衣裳

とかつらの大仕事」

女中「そーういや青木屋の若い衆があんたを探してたよ！」

与之助「(算盤はじいて) 人のことよりこつちのこと。後

四ツ刻で除夜の鐘。鐘が鳴ったら万事はご破算」

女中「いらっしや——あら!!」

入口に立っている青木屋の若衆。

与之助ふり返る。

あわてて中へとび込もうとする。

若衆、猛然ダツシユしてつかまえる。

与之助「(照れて) は、はばかりだな」

若衆「与之さん。古い手を! ——あんたの勘定(書付け

を突き出す)」

与之助(渋い顔)

音楽——短く。

町

画面に文字が——「六ツ(午後六時)」

声呼びながら通りすぎる。

「火事は神田駿河台でございましたあーッ」

かごが走ってくる。

早い息。

「エ、ホ、エ、ホ」

上州屋・表

かごが到着し、ころげ出る男。

男「柳町から参じましたッ」

水をまいていたお千代が、

千代「(奥へ) おかみさん!! おかみさん!!」

おかみと主人走り出る。

おかみ「生まれましたかッ」

男「へいッ」

主人「ど、どっちが!!」

男「おめでとうございます!! 七ツちつと過ぎ、男のお子

さんが!!」

おかみ「ご苦労さんッ」

男「お迎えのかごを用意してあります!!」

主人「与平!!」

与平「へいッ」

主人「祝儀を!!」

与平「へいッ」

おかみ「おみえ、おみえ!!」

みえ「(とび出す) おめでとうございます!!」

おかみ「ありがと。旦那さんと私の紋付きをすぐ

みえ「はいッ(とび込む)」

*

かごが二台、威勢よく出発。
送りに立っている丁稚、女中、番頭一同。
かごに向つて頭を下げる。

同・帳場

一同せわしなく入ってくる。

巳之「おめでてえおめでてえ!!」

伊作「さ、後一息!」

丁稚、女中奥へ行こうとする。

と、中番頭の太市が、

太市「お千代」

千代「はい」

太市「お前さんちよつとここへ残りなさい」

千代「何か——」

太市「お前さん——今夜(ちよつと)声をひそめて笑う」
いところへ連れてつてやるからね」

奥へ入りかけた丁稚と女中、その声がきこえてパツと
ふり向く。

勝手場

やってくる、千代を除く丁稚と女中たち。

伊作「(不安) 大丈夫だろうか」

みえ「(笑つて) 安心おしよ」

奈々「行くわけないじゃん」

伊作「こつちは半年前から計つて、愉しみにしてた宴会じ

やねえか」

みえ「フフ!! 伊作さん、気がもめるねッ」

巳之「いとしいとお千代ちゃん、だもんな」

伊作「そんなンじゃねえや!」

みえ「おや。じやどういうのさ」

奈々「ひよつとしたら中番頭さんも、お千代ちゃんに気が

あるのかもよ」

まき「そうだ。あの人いじわるだから、あんたからお千代

ちゃん取る気かも」

巳之「いいのかい? 伊作さん」

伊作「へつちやらだ! くれてやらあ!!」

みえ「この人あ、(尻をドンとたたく) つっぱるよッ」

伊作「いてえッ」

ドツと笑つた。

音楽——